
喧嘩ばかりの毎日だけど

緋月蒼空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喧嘩ばかりの毎日だけど

【コード】

N0656F

【作者名】

緋月蒼空

【あらすじ】

毎日毎日顔を合わすと喧嘩ばかりの二人。でも本当は仲良くなりたい・・・？ゾロとサンジのお話です。

仲良くなりたいと思ったらだめですか？（前書き）

初投稿で、初ジャンルです。

ボーイズラブです。

苦手な方はスルーしてください。

では、どうぞよろしくお願いします。

仲良くなりたいたいと思っただけですか？

「……っんのクソマリモー……！」

「なんだと！？このグルマユー……！」

毎日毎日顔を合わせれば喧嘩ばかり。

自分ですら思う。

いい加減止めればいいのにと。

本当はしたいわけじゃないから。

本当はちよつと仲良くしたかったりするんだぜ？

やっぱさ、仲間だし？

年も同じだしさ。

なんか本当は共通の話題とかあってもよさそうなものだろ？

でも、なんか喧嘩しちまう。

嫌いとかじゃないけどさ、合わないっーか、向こうもそんな感じだし。

なんか、他の奴だとそんな腹もたたないんだけどあいつだとダメ。意地になってしまふ。

「……なんでだろうなあ……？」

いつものように甲板で眠るこいつを見て、誰にでもなく問う。

「……人の顔見て何ぶつぶつ言ってるやがる？」

「っ！？」

完全に眠っていると思っていたのに。

「べ、別に何でもねーよ……！」

……あ、しまった。

また強い口調で言っちゃった。
だつてさ、こいつが初めから不機嫌なんだもん。
売り言葉に書い言葉つつうか。
わかってんだけどさ。
「…そうかよ…。」

あれ？

なんだ？こいつ。
いつもなら必ずなんか言い返してくるのに。
そのまままた寝る体制に入ってしまった。

「…………ゾロ…。」

「…」

「おい。」
完全に背中をむけてしまったゾロを呼ぶ。

「…」
返事はない。

「…何だよ？もう寝たのかよ？」
「…はえーな、一瞬かよ？」

バーカ

声に出さずに口だけ動かしてみる。

「サンジー!？」

しばらくその背中をぼーっと見ていると下から俺を呼ぶ声があった。

「腹減ったー!」

…「まったく、あいつはそれしかねーのかよ？」

「…チツ、しょうがねーな…。」

あまりに何度も呼ぶので、仕方がないから何か作ってやろうかと思っただ。

ちょうどおやつ時間だしな。

「ルファイ!今行っ…!？」

そう言っただけで立ち上がろうとしたのに、降りる方向を向いたままおもいきり後ろに引っ張られた。

引っ張ったのは一人しかいない。

「…てめー!何しやがるツ…!?!?!」

あまりに急だったし、おもいきり後ろに倒れ込んだので文句を言っただけで後ろを振り返るとあまりにゾロの顔が近くて驚いた。

しかも俺はゾロの腕の中にすっぽりはまってしまっている。

「……………!?!?!」

一瞬、思考回路が停止する。

驚きと恥ずかしさで、何も言葉が浮かんでこない。

「……………行くな……」

聞き間違いじゃなかっただろうか？

「……」ここにいろ。」

いや、今度ははっきり聞こえた。

「……………なんで？」

自分で考えると考えたくない答えに行き着きそうでした。少しだけ怖かったです。

「……………俺の傍にいろ……」

聞こえるか聞こえないかわからないような声でゾロは言った。

でも、俺にははっきりと聞こえた。

俺を抱きしめる腕の力がいつそう強くなって、少しだけその腕は震えていた。

「……………なんで？」

もう一度聞く。

答えはなんとなくわかっていただけ。

「……………好きだ…」

なんか、あまりにも突然だったのに、すんなり納得してしまった。もしかして、喧嘩ばかりふっかけてきてたのは、照れ隠しだった？それとも、好きな子にはいじわるしてしまうってやつ？

そう思うとなんか、ちよつと恥ずかしくて、ちよつとうれしいと感じてしまった。

ゾロの心臓の音がドクドクと脈打ってる。

普段めつたなことに動じないこいつが緊張してるのがわかる。

そう思ったら、おとなしくここにいてやるうかかか思ってしまった。

……………ああ、そうか、俺も同じだったのかも。

仲良くしたいとか、ちよつと思ったりして、でも素直になれなくていちいち小さなことにムカついたりさ。

なんか考えてみると、そうじゃねーかって思った。

「…ゾロ、」

「え？」

『俺も』と、言おうとした時だった。

「サンジー!!!」

また、ルフィの俺を呼ぶ声がして、俺はハツとした。

「…／／おい、離せ。」

「はあ？お前人の話聞いてなかったのか？」

また、ゾロは腕の力を強めてしまった。

「…テメー馬鹿だろ？」

「あ？」

「これだけ呼ばれて出て行かなかつたら不自然じゃねーか。…また、戻ってきてやるから今は離せ。」

「え？」

一瞬、ゾロの腕の力が緩んだ。

その隙を突いて俺はそこから抜け出して、立ち上がる。

「おいっ！ちょ、待て…！」

ゾロはあわてて俺を呼ぶが気づかないふりをして、そのまま下へ降りていった。

「バーカ。」

小さくつぶやいて。

「ルフィ！ちょっとだけ待ってる！何か作ってやるから！」

「!?!」

「『やった!』」「『』」

ルフィの声にウソップとチョッパーの声も重なった…。

こんな、『すき』だなんて、自分の気持ちなのに予想外過ぎる。

あーあ、これからどうしよう…。

仲良くなりたいたいと思っただらだめですか？（後書き）

いかがでしたか？

全然ぬるかったでしょ？

では、またの機会に。

読んでくださった方ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0656f/>

喧嘩ばかりの毎日だけど

2010年10月13日16時02分発行